2020年度の授業を振り返って

若林俊英

2020年度の授業は5月11日から実施されることになった。

それまで一度も考えたこともなかったオンライン授業という形であったが，とにかく授業が始まり，何となくほっとしたのも事実である。ただ，私が行ったのは，授業によりTeamsまたはZoomを使用し，WebClassを活用したものであったため，頭の中が混乱してしまった。

WebClassに載せる教材作成は，自転車操業状態。一度でも止まると，回復できないのではないかとの強迫観念に囚われていた。何とか前期を乗り切れば，後期からの授業は対面で実施できると思っていたのだが…。

後期，担当している経営学部の基礎ゼミⅠ・Ⅱは，対面で実施するということであったが，授業が進行するにつれてオンラインを希望する学生が増え，最後まで対面で受講してくれた学生は，2科目合わせて10名余であった。これは，私の対面授業に魅力を感じない学生が多かったということも，その理由の一つであり，反省している。といっても，教員の動きが制限されている状況での対面授業のあり方については，再検討が必要であると痛感した。

日本語に関しては，オンライン授業であることの利点もあったように感じた。従来の対面授業では，他の学生と顔を合わせることが苦手で欠席が多くなり，結果として不合格となっていた学生が，よい成績をとり合格となったことなどは，その一例であろう。また，板書に関しても，対面授業に比べオンライン授業では，授業中に共有画面でwordに直接打ち込みながら授業を行ったため，より深いところまで説明を加えることができたと思われる（もちろん，授業中の板書事項に関してはWebClassに載せ，学生が後で確認できるようにした）。ただ，対面では，教授内容を理解しているかどうかを学生の表情によって確認しながら行うことができるが，オンラインではそれが不可能なので，この点工夫が必要かもしれない（画面上で顔を見ることは可能だが，私には微妙な表情の変化までは読み取れなかった）。

私は，国語学（現在は，日本語学と呼んでいる）が専門で，対象としている作品も院政・鎌倉時代である。現在は日本語を中心に教えているが，語学は，対面でなければならない，という固定観念に囚われていた。しかし今年度，見よう見まねでオンライン授業をやってみて，まだまだ改善の余地はあるものの，これも良いかなと思えるようになってきた。これは，私にとって2020年度の授業における大きな収穫かもしれない。